

1 期

二〇二四年度 中学校入学試験問題

国語

- 1 問題用紙は開始のチャイムが鳴ってから開いてください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 受験番号と氏名は解答用紙と問題用紙に記入してください。どちらも集めます。
- 4 。、「」などは一字に数えます。
- 5 試験時間は50分です。

受験番号

--	--	--	--

氏名

--

〔一〕

次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 次の——線の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。送りがなが必要な場合は、ひらがなで書きなさい。

- 1 雑穀は栄養が豊富である。
- 2 思いの外、早く帰ることができた。
- 3 図工の時間に版画を刷る。
- 4 自分の志す道を行く。
- 5 勉強のシユウカンをつける。
- 6 日本のツウカの単位は「円」である。
- 7 真理をツイキユウする。
- 8 アヤマリを正す。

問二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある秋のことでした。二、三日^①雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。雨があがると、ごんは、ほっとしてあなからはい出ました。空は 晴れていて、もずの音がキンキンひびいていました。

ごんは、村の小川のつつみまで出てきました。あたりのすすきのほには、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が ましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきはぎのかぶが、黄色くにこった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは、川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、^②そうつと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十^{（注1）}だな。」と、ごんは思いました。兵十は、ほろほろの黒い着物をまくし上げて、こしのところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、円いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみのいちばん後ろのふくろのようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさった木切れなどが、ごちゃごちゃ入っていましたが、でも、ところどころ、白い物がきらきら光っています。それは、太いうなぎのはらや、大きなきすのはらでした。兵十は、^{（注2）}びくの中へ、^③そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。そして、また、ふくろの口をしばって、水の中へ 入れました。

（新美南吉『ごんぎつね』による）

（注1） はりきりというあみ…はりきりあみ。魚をとるために、川はばいっばいに張りわたして使うあみのこと。

（注2） びく…とった魚を入れておくかご。

1 —線①「雨がふり続いた」とありますが、「続いた」をひらがなにすると「つづいた」となります。次の(1)～(3)の各文の□に、「づ」か「ず」のどちらか一字を入れなさい。

(1) い□れまた来ます。

(2) 舌つ□みを打つ。

(3) 卒業までのわ□かな時間を過ごす。

2 □A・□B に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア からつと イ ぎよつと ウ さくつと エ どつと オ ばしつと カ ぴつと

3 —線②「そうつと」がかかる言葉を、本文中からぬき出して答えなさい。

4 —線③「入れました」とありますが、この動作をしたのは誰だれですか。本文中からぬき出して答えなさい。

5 次の(1)～(3)の□には、本文中に出てくる色を表す漢字が一字入ります。()内の意味の慣用句になるように、□に入る漢字一字を答えなさい。

(1) □ 色い声

(甲高かんだかい声)

(2) 大□柱

(一家の中心となって支えている人物)

(3) □ 羽の矢が立つ

(多くの中から指定して選り出されること)

〔二〕

次のⅠ・Ⅱは、同じ本から取り上げた文章で、白岡六花と春山早緑という中学生が会話をしている場面です。これらの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。、「」などは一字に数えます。

Ⅰ

きつかけは、部活のぐち——ほんとうに、ささいなこと。

いやなことがあって。それを友だちに聞いてもらって。そうして、なんとなくすっきりする。そんなの、だれだつてしていること。とくにめずらしくもない、ふつうのこと。

なにも特別じゃない。日常のひとつコマ。

上枝先生には言えなかったほんとうの気持ち。ずっとがまんして、のみこんで、黒々とした澱(注1)おりののようにたまっていた感情。私はそれを、早緑に聞いてほしかった。

あの子なら、いっしょにおこってくれと、そう思ったから。

「……どうしてみんな、ちゃんと絵を描かないんだろう」

私は美術部でのことを話して、最後にこう言った。

①「ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに」

それ、ほんとひどい——そう言ってくれと思った。

六花は悪くないって。なにもまちがってないって。

なぐさめてくれるって、励はげましてくれるって、信じていた。

だけど、そうじゃなかった。早緑はいやそうな顔で、吐はきすてるみたいに言った。

そんなの、しょうがないよって。

「だって、六花みたいに、才能がある子ばかりじゃないでしょ？」

「だれだつてさあ、どうしても勝てない人を見たら、やる気もなくなっちゃうよ」

そう言って、早緑は美術部の子たちの 1 を持った。私の味方じゃなくて、あの子たちの味方をした。あの子たち

がまじめにやっていないのは、私のせいみたいな、そんな言い方をして、私のことを責めた。
シヨックだった。それから、怒りがわいてきた。

でも、何度説明しても、早緑はわかってくれなくて。

それどころか、どんどんふきげんになっていった。

②「いいよね、白岡画伯は」

最後に、早緑は言った。

「好きなことがちゃんとあつて。得意なことがちゃんとあつて。幸せじゃん、それ」

早緑のその言葉で、そのときの表情で。

私にはわかった。③ わかりたくなかったけれど。

私たちは、おたがいにはわかりあえないんだってことが、わかってしまった。

II

「あの、こんなこと今言ってもしょうがないのかもしれない。六花のこと、こまらせたらごめん。でも、言わなきゃって、ずっとずっと、そう思ってた」

何重にも予防線を張るように前置きをしてから、早緑はためらいがちに言った。

「あたしさ……ほんとのこと言うと、毎日泣いてたんだ。あのころ」

泣いてた？

「……私とけんかしてから、ってこと？」

早緑は 2 を横にふった。

「ううん、ちがうちがう。そうじゃなくて、そのまえから」

④「そっか……うん」

ちよつぱり期待して、それからがっかりした自分が、ひどくはずかしい。

って……え？

「私とけんかする、まえ？」

早緑はうなづく。

「陸上部の練習が、いやでいやで。みんな、あたしよりずっと足が速くてさ。練習もきつくて、ぜんぜんついていけなかった。先輩せんぱいこわいし。しょっちゅうおこられてたし。ほんと、毎日毎日、つらくてしょうがなくて。家でめそめそ泣いてたの」

私はとなりを見た。なつかしい、早緑の横顔。遠くを見つめる黒い瞳ひま。

「でも、六花には言えなかった。そんなこと、ぜったい言えなかった。はずかしかったから。一生懸命けんめい、絵を描いて、努力を楽しむことができる六花に、そんなこと、言えなかった。まぶしかつたよ。あたしは六花のことが、ずっとまぶしかつた……だからさ、あの日。あたし、責められてるような、そんな気がしちやつたんだよ」

——ばかみたい。まじめにやらないなら、やめたらいいのに。

あの日、^⑤自分が放った言葉が、どこか遠くで響いた。

早緑はちいさく笑った。ぽつぽつ、抱かかえていた気持ちをこぼすように、言葉をつむぐ。

「あたしもさ、意地になっちゃって。あたしのことじゃないのに。六花がきずついていたの、わかっていたのに。でも、あたしもさ、あの日、ほんとにつらかった。大好きだった友だちに、自分のことを否定されているような、気持ちがしてさ。だから、あんなこと言っちゃった。六花に、ひどい言い方、しちやつた。ほんとうに……」

そう言って、^Aおずおずとこちらを見た早緑の顔が、固まる。

「六花？」

「……ごめん」

「え、いや、ごめんごめん。あの、なに？ 泣かないで。ちょっと……あ、ハンカチ」

あわあわとポケットをさぐる早緑。私はふるえていた。

景色がにじんで、ぼろぼろとこぼれて、息をするのもつらかった。

⑥ なにが、「わかりあえない」だ。

わかっていかなかったのは、私のほうだった。

自分のことではいいいいいいで、^⑦早緑の気持ち、考えたこともなかった。さんざん被害者ひがいしゃのような顔をしてたくせに、ほんとうに悪いのは私だった。

私、早緑のこと、きずつけてたんだ。

「ほら、ちよつと眼鏡外めがねして。あ、鼻もたれてるよ、もう……」

そうやって、私の顔をハンカチでぬぐう早緑。私はしゃくりあげながら、くり返す。

「ごめん。ごめんね、早緑。ほんとうにごめんなさい……ごめんなさい……」

「ううん、いいから。もういいんだよ。あたしこそ、ごめん……ああ、まずったな。泣かれると思わなかった。っていうか、六花も泣くんだね。はじめて見たよ」

あはは、と軽やかに笑う早緑。

なんだろう、私を取り乱したせいで、さっきまで緊張きんちやうしていた早緑のほうは、かえって落ちついたみたいだった。それがちよつとだけ癩しらくに障さわる。

私はハンカチを顔に押しつけてくる早緑の手をぎゅつとにぎった。

「……もつと、もつとはやく言ってよ」

うらみがましく、私はつぶやく。そんなことを言う資格、ひとつもないのに。

私のせいなのに。

「何度も言おうと思ったよ。だけど、うん……やっぱりさ、こういうのって、しかるべきときつてもんがあるじゃん？」

「なに、それ」

ちいさくはなをすすする私に、早緑はうなずいた。

「一年の三学期に、決めたの。その日、六花に会いに行こうと思った。ちゃんと、話をしなきゃって。だけど、美術部に行ってもいなくてさ。小畑先輩おばたが、体育館に行ったよ、って教えてくれて。で、行ったんだけど、やっぱり話しかけられなかった」

早緑は思いだすような目をした。

「体育館で、剣道部が練習してて。ほら、ウサギ王子とかといっしょに、エビユヤ本多くんが大声出しながら竹刀でばしばしやあって。で、すみっこで、それを見ながらさ、一心不乱って感じで、六花は絵を描いてた。もうさあ、眼鏡のおくで、目がぎらぎらしてて。あたし、思いだしたんだ」
「なにを？」

早緑は照れたように笑った。

「はじめて、六花に話しかけたときのこと。シロクマの絵がじょうずだねって、ほめたこと。六花の顔がパッと明るくなって、それがびっくりするほどかわいらしくて。友だちになりたいって、思ったこと」

それから私をまっすぐに見て、言った。

「体育館のすみで、そんなことを考えてたら——ほら、おなじクラスのさ、黒野くろのっているじゃん？ 剣道部の（注2）幽霊部員（幽霊部員）。前まえ髪がみの長い、ちよっとひねくれた感じのやつ」

黒野くん……私の中で、見えていなかったなにかがつかなくていく。

なにも言えないでいる私に、早緑はうなずいた。

⑧「あいつがふらっと歩いてきて、あたしに言ったんだ」

「えらいよな、白岡六花。美術部、ゆるい部活なのに、ひとりだけ毎日スケッチして、先生に意見聞いて。ほかの部員たちに煙たがられても、負けないでまじめにやってる」

あたしはうなずいて、ちいさな声で言った。

「……六花は、絵を描くのが、ほんとうに好きだから」

だけど、自分の声が、どこかとげとげしてる気がして、いやになった。そしたら、黒野のやつ、こんなことを言ったの。

「好きだから努力できるのか、努力できるから好きなのか……鶏（鶏）が先か卵（卵）が先か、みたいな話だよな」

あたし、よくわからなくて。どういうことって、たずねたの。

黒野、笑って言った。

「ほら、好きだから続けられる。だからうまくなるっていうのはたしかにあるけどさ、そもそも、ある程度うまくないと、

好きにはなれないじゃん？ 自分でへたくそだなあって思って、人から向いてないって言われて、それでも絵を描くのが好きとかさ。ちよつとむずかしいよな。苦手なことに立ち向かうのは、それだけでストレスだろ」

そんなふうに。

その言葉が、すごく響いた。なんだろう、いくら走っても、みんなに追いつけない自分のことを言われているみたいに、思った。あたし、なんで走ってるのかな。

急に、そんなことを考えた。走ることが得意だと思ったから？ たぶんそう。人よりはちよつぱり、得意だと思ったから。ほんとはそれほど、好きじゃなかったのに。

「好きなものがない人は、得意なものがない人は、どうしたらいいんだろう……」

言ってから、なんか、情けないなって、自分でも思った。

だけど、黒野は肩かたをすくめて、こう言ったの。

「べつになくてもいいと思うけど」って。

なにそれ、と思って、あたし、食いさがあったの。

「あたしは、ほしいよ。好きなもの。得意なもの」

「じゃあ、そうしたら？」

「え？」

「好きなものがほしい。得意なものがほしい。じゃあ、そのために努力すればいいだろ。ちゃんと、それは努力の理由になるよ」

「だけど、努力すれば……なんとかなるのかな」

そしたら黒野はさ、まぶしBそうに六花のほうを見たんだ。

「白岡六花がコンクールで賞をとったのだから、ああやって努力を続けているからだろ」

「だからさ、あたしは思ったの」

公園のすみっこ。並んですわったベンチ。

夕日の光を浴びて、早緑は言った。

「やっぱり、がんばらなきゃだめだ、って。今、ここで逃げたくない。あたしには、まだ六花に話しかける資格がないや、って。そのときの自分は、六花に誇れるような自分じゃなかったから。だから、がんばろう、って。次に六花と話すときは、胸を張れるような自分でいたかったから。そうなりたいと思えたから」

早緑は笑った。きらきらと、かがやくような顔で、笑った。

「それから、すこしずつ、あたし、陸上が好きになった。走ることが、っていうか、走ることになり打ちこむ自分のことが、好きになっていった。だから」

涙ですっかり塩っ辛い顔になった私に、早緑は言った。

⑨「だから、今のあたしがあるのは、六花のおかげ」

私はうなずく。「今は、じゃあ、楽しい？」

「うん。すつごく。胸を張って、そう言えるよ。だからさ」
なかなかおもしろい。

照れたように、でもまっすぐにそう言った早緑の瞳の色に、私は思います。

あの日、早緑が話しかけてきてくれたときのことを。

(村上雅郁『きみの話を聞かせてくれよ』所収「シロクマを描いて」による)

(注1) 澱……液体の底に沈んだかす。

(注2) 幽霊部員……その部に所属しているが、活動に参加していない人。

問一 —— 線①「それ、ほんとひどい」とありますが、「それ」とはどのようなことですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 絵の上手な六花が、絵の下手な部員をばかにしたこと。
- イ 六花が、ふまじめな美術部の部員たちを非難したこと。
- ウ 美術部のほかの部員たちが、まじめに絵を描かないこと。
- エ 上枝先生が、六花のほんとうの気持ちを分かっていること。
- オ 六花が辛い気持ちになったため、絵を描けなくなったこと。

問二 —— 1・2 には、体の一部を表す語が入ります。最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 口
- イ 首
- ウ 腰こし
- エ 腕うで
- オ 腹
- カ 肩

問三 —— 線②「いいよね、白岡画伯は」とありますが、この表現に関する説明として適切でないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「いいよね」という言葉には、六花の主張へのいらだちが込められており、相手をつき放す表現となっている。
- イ 「白岡画伯」と呼ぶことで、絵の才能がある六花との間に距離を感じて、心の壁ができたことを表している。
- ウ 絵の上手い人を表す「画伯」という呼び方で、美術部でがんばっている六花を尊敬する気持ちを伝えている。
- エ 絵が得意な六花を、好きなことや得意なことがない自分と比較して、嫌味を込めてあえて「画伯」と呼んでいる。
- オ 早緑から発せられた「いいよね」という言葉には、好きなことがある六花へのうらやましさが表されている。

問四 — 線③「わかりたくなかったけれど」とありますが、六花はなぜこのように思ったのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア ずっと仲が良く、自分の話を肯定^{こうてい}してくれていると思っていた早緑が、自分のことを理解してくれていないことを認めたくなかったから。

イ 早緑が部活を楽しんでいないことに気づいてしまったが、好きなことを楽しんでいない人の気持ちなどわかりたくなかったから。

ウ ほどよい距離感を保っていた知人である早緑が、自分に対して本気であこがれて、うらやんでいることを感じ取りたくなかったから。

エ 自分と同じように部活に打ち込んでいると思っていた早緑が、自分とは違^{ちが}ってまじめに部活に参加していないことなど知りたくなかったから。

オ 仲良しの友達だと思っていた早緑が、ずっと「六花とはわかりあえない」と思って自分と接してきたことに気づきたくなかったから。

問五 — 線④「ちょっとぴり期待して、それからがっかりした自分」とありますが、六花はどのようなことを「期待」していたのですか。説明しなさい。

問六 —— 線⑤ 「自分が放った言葉が、どこか遠くで響いた」から、—— 線⑥ 「なにが、『わかりあえない』だ」までの六花の心情はどのようなものですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 早緑に寄り添うつもりが責めてしまい、早緑が「わかりあえない」と言い返してきたことに悔しさを感じている。
- イ 早緑の横顔を見て忘れていた自分の言葉を思い出したが、早緑が本心を語り出したことで混乱してしまっている。
- ウ 美術部員に対する怒りが、実は早緑への思いであったことを指摘され、悩ませていたことを申し訳なく感じている。
- エ かつて自分が言った言葉を早緑に返されたことによって、早緑とわかりあおうとしなかったことを反省している。
- オ 自分の発した言葉が早緑を深くきずつけてしまったと気づき、早緑に対する自身のうかつな言動を後悔している。

問七 —— 線A 「おずおずとこちらを見た」・—— 線B 「まぶしそうに六花のほうを見た」から読み取ることができる心情の説明として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 懐かしさや喜びを抱いている。
- イ おびえや恐怖を抱いている。
- ウ 感謝や親しみを抱いている。
- エ ためらいや不安を抱いている。
- オ 皮肉や軽蔑の気持ちを抱いている。
- カ あこがれや尊敬の念を抱いている。

問八 —— 線⑦ 「早緑の気持ち、考えたこともなかった」とありますが、「早緑の気持ち」とはどのような気持ちですか。「気持ち」に続くように、本文中から十五字程度でぬき出して答えなさい。

問九 — 線⑧ 「あいつがふらっと歩いてきて、あたしに言ったんだ」とありますが、黒野が言った言葉によって早緑はどのようなことを思ったのですか。その説明をした次の文の に当てはまる語の組み合わせとして、最も適切なものをあとのア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

早緑は が につながると思い、得意であるだけでは物事は続けられないと考えていた。しかし、黒野が が最初にあると考えていることを知り、「やっぱり、がんばらなきゃだめだ」と思った。

- | | | | | |
|---|--------|------|------|---|
| ア | 〔 a 好き | b 努力 | c 好き | 〕 |
| イ | 〔 a 好き | b 努力 | c 努力 | 〕 |
| ウ | 〔 a 努力 | b 好き | c 努力 | 〕 |
| エ | 〔 a 努力 | b 好き | c 好き | 〕 |

問十 — 線⑨ 「だから、今のあたしがあるのは、六花のおかげ」とありますが、早緑がこのように言ったのはなぜですか。説明しなさい。

〔三〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。、「」などは一字に数えます。

人は、食べなくては生きていけないように、学ばなくてはならない。その人に、学ぶつもりがなくても、人生はつねに何かを学べとほくたちの前に試練をもたらす。

かつては、学ぶのは自分の人生を少しでも豊かにするためだと信じて疑わなかった。でも、今はまったく異なる実感がある。自分だけのために学ぶ、というが、ほくはその「自分」が何であるかを知らないんじゃないだろうか。

君は、自分の力だけで生きているのだろうか。気が付かないところで、1 多くの人たちに——それも亡くなつた人たちも含めて——助けられて、日々を送っているのではないだろうか。自分とは、避けることのできないかたちで他者とながつている存在なのかもしれない。

たとえば今、ほくたちの前に開かれて(注1)いる叢知は、誰が運んでくれたのだろう。それは、食卓(注2)にのぼる食べ物と同じで、気が付かないところで誰かが運んでくれたのではないだろうか。

プラトン(注2)（BC四二七～BC三四七）という哲学者(注2)がいる。ある人は彼を、その師ソクラテスとともに、哲学の祖と呼ぶ。書店にいけば数百円でプラトンの著作を日本語で読める。

^①これは驚くべきことだ。でも、これが実現しているのは、時代を超えて、東西の文化を超えて、無数の人々がプラトンの言葉を後世に伝えなくてはならないと感じ、実践(注3)してくれたからだ。不要なものだと思えば、歴史のなかでAと消え、今日まで伝わることなどないのだから。

君は今、たくさんのことを学んでいる。学校だけでなく、友達や好きな人、2 家族、嫌いな人からもほくたちは学ぶことができる。君は本を読む。多くの、そして確かな知識を得たいと思ってページをめくる。目に見えるものでも、見えないものでも、人は、自分のものにするためにそれを手に入れ、会得(注4)しようとする。手にしたものはなかなか手放さない。でも、もしかししたら、大切なのは、物事を自分だけのものにするのではなく、誰かのもとに届けることかもしれない。

これからほくは君に、少し長い手紙を書こうと思う。そして何人かのほくの人生を変えてくれた人物と言葉を、君に伝えることができるかと思ったら願っている。

もちろんぼくにとって重要だった人が、君にもそうなるとは限らない。3、ぼくがその人というよりも人間そのものを信頼したように、君にとっても信頼できる人間が、今日までの長い歴史のなかには必ずいることを伝えられればと思う。ぼくたちは、ある特定の個人を信頼できなくなることもある。でも、そのことは、人間そのものへの信頼が失われたことを意味しない。ぼくや君がそうであるように、人は誰もあやまちを犯す。でも、ぼくがいう「人間」には、その失敗から学んだほんとうの知恵もつまっている。

今、ぼくたちは、とても困難な時代を生きている。人が人とのつながりを見失いつつある時代に生きている。ある意味では、人を信頼するという当たり前のことが、こんなにむずかしくなった時代はないかもしれない。でも君が、個人を信頼することがむずかしいことがあっても、人間への信頼を失わないでいてくれたら——今という時代に失望を感じることがあっても、絶望のなかにさえも希望を見出そうとした人が、かつていたことを忘れないでいてくれたら。そう願ってやまない。

君くらいの年齢のとき、ぼくは学校の休み時間が嫌いだった。授業中は、先生の話の聞いたり、聞くふりをして自分の好きな本を読んでいたればよかった。でも、休み時間には、同じクラスの人と話をしなくてはいけない。

友達がいなわけではなかったけど、それよりも親しく交わっていたのは歴史の世界の住人たちだった。ひとりでいたいのに何となく、そんな雰囲気でもなく、仲がよいふりをしなくてはいけないのが、いやだった。

あのときは、どうしてそんなにひとりでいたいのか分からなかったけど、今ははっきりと分かる。人間にはあるとき、孤独が必要なんだ。

孤立と孤独はちがう。孤立は、社会から追放されることで、これはあつてはならない。でも、孤独はなくてはならない。それは、自分と向き合うことであり、今の自分にほんとうに必要なものを見極めるときでもある。

本を読むとき、人はひとりでいなくてはならない。読むということは、ぼくたちに孤独になることを求めてくる。

孤独とは、たんに一人であることではない。現代は、部屋で一人でも、インターネットを介して無数の人々とつながることができる。孤独は、こうしたつながりから少し離れて、この世界に足を踏み入れることだ。

こころの世界は、ほの暗い。ふとしたときにぼくたちはそこを、かいま見るから、じつはみんな、そのことを知っている。知っているから、自分と向き合うのを避けることがある。そう、ほんとうの意味で「ひとり」でいるためには、少し勇気が必要

なんだ。

高校生の頃、本を読む、ということは、文字を追うことではなく、それを書いた者と無言の対話を交わすことだった。クラスメイトは分かってくれないようなことでも、この本を書いた人なら分かってくれる、そんな感じがした。

若い頃は、こんなことを考えているのは自分だけだと思っていたし、自分が変わり者であるという自覚もあった。でも、自分で文章を書くようになって発見したのは、文学や芸術の世界には、変わり者しかいないということだった。本を読むことは、言葉を通じてその人に会い、言葉を交わすことだと語る哲学者のデカルト（一五九六～一六五〇）のような人もいた。

江戸時代に 伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）という在野の儒学者がいた。儒学者とは、『論語』の語り手である孔子（BC五五二～BC四七九）に始まる儒学の研究者のことだ。

孔子は、古代中国の人物だが、この人物の思想は、江戸時代の日本でも大きな変貌を遂げた。その潮流を作った中心的人物のひとりだ。君も学校でならったかもしれないが、儒学者には林羅山（一五八三～一六五七）のように、公に近い場所で行う人もいた。だが、仁斎はちがって、あくまでも民衆のなかで生き、学んだ。

この人物にとって『論語』を読む、ということは、文字となった哲学を理解することではなかった。文字という扉の奥で孔子と語り合うことにほかならなかった。ぼくはこの人物の存在を小林秀雄（一九〇二～一九八三）という文学者の著作を通じて知った。小林は、仁斎にとって、「読書とは、信頼する人間と交わる楽しみであった」と書いたあと、こう記している。

彼は、精読、熟読という言葉とともに体翫という言葉を使っているが、読書とは、信頼する人間と交わる楽しみであった。

論語に交わって、孔子の警咳を承け、「手の之を舞ひ足の之を踏むところを知らず」と告白するところに嘘はない筈だ。この楽しみを、今、現に自分は経験している。だから、彼は、自分の論語の註解を「生活の脚注」と呼べたのである。

〔学問〕『考えるヒント2』小林秀雄

仁斎は、『論語』を読んでいるとき、手を叩いて喜びを表現せずにはいられないような、また、足が宙に浮いているような深いよろこびに満たされていた。彼にとって「読む」とは、単なる知識の習得ではなく、生活全体を巻き込む出来事だった。だからこそ、彼は自分が書いた、『論語』の註解書である『論語古義』を「生活」による脚注だと呼べたのだ、というのだ。

頭で読むだけでなく、その言葉を生きてみなければいけないものが『論語』という書物に宿っていて、仁斎はそれを日々の生活のなかでたしかめていったのだった。

本は、いかに多くを読むかが問題ではない。むしろ、どうやって「読み終わらない本」^④に出会うかが問題だ。仁斎にとって『論語』は、日々、新生する書物だった。毎日、新しい発見を彼にもたらした。彼は、『論語』が分かったなどと、けっしていかなかっただろう。むしろ、読めば読むほど、謎は深まっていったというだろう。

ここでの『論語』は、長く読み継がれてきた「古典」に置き換えてもかまわない。仁斎にとっては『論語』だったものは、ある人にとっては『聖書』で、別な人には『歎異抄』^(注8)かもしれない。「古典」は無数にある。仁斎が『論語』を見つけたように、ぼくたちも「わたしの古典」を見つけて行かなくてはならない。

(若松英輔『読み終わらない本』による)

(注1) 叡知……物事の本質を見通す、深くすぐれた知性のこと。

(注2) B C……西暦元年^{せいれき}よりも昔の年を表現する方法。

(注3) 変貌……姿や様子が変わること。

(注4) 潮流……時代の傾向^{けいこう}。

(注5) 体翫……信頼する人間と、全身で交わるように深く読み味わうこと。

(注6) 警咳……尊敬する人や身分の高い人の話を直接聞くこと。

(注7) 新生……新たな気持ちで生まれ変わること。

(注8) 歎異抄……鎌倉時代の僧侶・親鸞^{しんらん}の教えをまとめた書物のこと。

問一

1

3

に当てはまる最も適切な語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア でも イ だから ウ じつに エ あるいは オ ただし カ なぜなら

問二

——線①「これは驚くべきことだ」とありますが、「これ」とはどのようなことですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 現代に生きる私たちにとって、昔の哲学者の素晴らしい教えは、たった数百円の価値にしかならないということ。
イ 現代に生きる私たちが、情報技術の発達により、昔の哲学者の言葉にたくさん出会えるようになったということ。
ウ 現代に生きる私たちにとって、昔の哲学者は、多くの人の心を動かすほど魅力的な人物であったということ。
エ 現代に生きる私たちと同じように、深く物事の道理に通じる言葉を、昔から人々は求めていたということ。
オ 現代に生きる私たちが、時代や場所をこえて、昔の哲学者の考えを本によって知ることができるということ。

問三

A

に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 潮 イ 池 ウ 海 エ 泡あわ オ 沼ぬま

問四 〜〜線㉞「かいま見る」・〜〜線㉟「あくまでも」の本文中の意味として、最も適切なものを次の中から選んで、それを
ぞれ記号で答えなさい。

㉞ 「かいま見る」

- ア じつと見る
- イ ちらっと見る
- ウ くり返し見る
- エ ゆっくりと見る
- オ おそろおそろ見る

㉟ 「あくまでも」

- ア どこまでも
- イ あきたらずに
- ウ 時々思い出して
- エ どれだけ悪くても
- オ あやしげに

問五 〜〜線㉠「ほんとうの意味で『ひとり』でいるためには、少し勇気が必要なんだ」とありますが、なぜですか。「ひとり」
がどのような状態であるかを明らかにして、説明しなさい。

問六 〜〜線㉡「伊藤仁斎（一六二七〜一七〇五）」という在野の儒学者がいた」とありますが、この儒学者にとって『論語』
を読むとはどのようなことでしたか。本文中から二十字以内で探し、はじめと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問七 — 線④ 「『読み終わらない本』とありますが、どのような本のことですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 文章が難しく読み進めることも大変なため、一年以上かけてもなかなか最後のページまでたどり着けない本。
- イ 何度読んでも新たな発見があり、日々の生活の中で折に触れて手に取りながら読み深めていくような本。
- ウ 最後までひと息に読んでしまうのがもったいないので、少しずつ物語の展開を追っていきたくなるような本。
- エ 古今東西の「古典」のように、その一冊を読むことで興味が広がり、次々と読みたい本が生まれてくるような本。
- オ 読み進めていくうちに自分の中に忘れがたい言葉が積み重なっていき、友人や家族と共有しないではいけない本。

